

長野県富士見市の大石遺跡1号住居址ではこの3点と同じタイプの土器が、また、11については同じ大泉村の小坂遺跡で類似した土器が出土している。

302号土坑（第8・9図）南北約120cm、東西約65cm、深さ約25cmの浅い土坑である。土坑の北寄り、底面から高さ13cmの部分で琥珀製垂飾が1点出土している（PL-1第9図1）。これは250号土坑の琥珀製品と同様に、赤色を帯びた飴色を呈し、崩壊のない良質な琥珀製垂飾である。形状は丸味を持った直方体であり、表面は丁寧に磨かれている。貫通する孔に平行して、琥珀表面に穿孔の痕跡が残るが、これは穿孔に失敗したものか、あるいは琥珀の原石から垂飾1個体分を分割する際の穿孔の名残りかもしれない。共伴する土器は皆無である。（五味信吾）

【琥珀製垂飾について】

甲ッ原遺跡の琥珀製垂飾は、山梨県内出土の縄文時代の琥珀製品のものとしては一の沢遺跡・金の尾遺跡に次ぐ3例目で、質量とも第一級の資料と言える。

琥珀（amber）は、松などの樹液が化石化した脆弱な有機物で、色調は赤色、黄色、飴色を呈し、半透明である。こうした特徴は甲ッ原遺跡の琥珀にも当てはまる。日本列島では岩手県久慈市周辺・北海道石狩地方・千葉県銚子市周辺などが主要産地として知られているが、縄文時代の琥珀出土遺跡は圧倒的にこの3ヶ所の周辺地域に多い。銚子の場合では、中生代白亜期に属する銚子層群の泥炭層から琥珀が産出する。この原産地に近い銚子市栗島台遺跡では、琥珀製大珠のほか琥珀の原石や垂飾の未製品が出土しており、琥珀の加工作業が行われた「攻玉遺跡」として注目されている。関東地方で発見された縄文時代の琥珀製品は中期に最も多い。八丈島の倉輪遺跡では前期終末から中期初頭のものと思われる琥珀製の小玉が出土しており、琥珀の搬路について考える上でも興味深い。また、長野県岡谷市の梨久保遺跡でも琥珀の垂飾が土坑内から出土しているが、これも前期末から中期初頭のものとして捉えられている。

甲ッ原遺跡250号土坑の琥珀製垂飾は五領ヶ台期に属することが明らかである。一方、302号土坑の琥珀製垂飾は共伴土器がないので時期を決めることは困難であるが、250号土坑の垂飾と材質・色調・技法に共通点が見られること、全長約200mにも及ぶC区の中で、琥珀を出土した2つの土坑が9mの距離に存在することは偶然とは考え難いことから、五領ヶ台期のものとして捉えた。両土坑の周囲には同時期の土坑がほかにも存在することから土坑集中地区と考え、これを中心に約30m北に37号住居址、約45m南に18号住居址が存在することを併せて、五領ヶ台期の集落を想定することが可能であり、興味深い。なお、甲ッ原遺跡の琥珀は科学的分析を受けていないが、地理的見地からは千葉県銚子産の可能性が高い。（五味信吾）

引用・参考文献

- 寺村光晴・安藤文一 1973 「千葉県栗島台遺跡の調査」『考古学ジャーナル』89 ニューサイエンス社
伊藤睦憲 1982 「千葉県栗島台遺跡発見の琥珀製大珠」『考古学雑誌』第67巻4号
松下亘「琥珀」1982 『縄文文化の研究』8 雄山閣
佐々木清文 1983 「琥珀の産地と流通」『上野山遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第67集
寺村光晴 1985 「琥珀の大珠—その出現と様相—」『和洋女子大学学部創設35周年記念論文集』
室賀照子 1985 「琥珀は語る…古代アンバールートを探る」『末永先生米寿記念献呈論文集』末永先生米寿記念会

山梨県立考古博物館 1988 『古代の装身具』
 藤田富士夫 1989 『玉』考古学ライブラリー52 ニューサイエンス社
 原田昌幸 1990 「縄文時代の玉」『月刊文化財』文化庁文化財保護部
 吉田格 1992 「縄文時代の琥珀～南関東・山梨県下の出土例について」『考古学論究』第2号 立正大学考古学会
 千葉県文化財センター 1992 「生産遺跡の研究2－玉－」『研究紀要』13
 山梨県教育委員会 1986 『一の沢西遺跡ほか』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書16集
 山梨県教育委員会 1987 『金の尾遺跡ほか』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第25集
 鉾子市教育委員会 1991 『粟島台遺跡発掘調査報告書』
 粟島台遺跡発掘調査会 1990 『鉾子市粟島台遺跡発掘調査報告書』
 福田依子 1990 「草刈貝塚の小玉について」『研究連絡誌』第28号 千葉県文化財センター
 東京都八丈町教育委員会 1987 『倉輪遺跡』
 岡谷市教育委員会 1985 『梨久保遺跡』
 長野県教育委員会 1975 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－茅野市・原村その1 富士見町その2－』
 山梨県教育委員会 1987 『小坂遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第63集

6. 平安時代の住居址と遺物

今年度の調査で発見された平安時代の住居址は39号住居址の1軒のみであり、過去4年の調査を総計しても2軒に過ぎない。

39号住居址（第10・11図）1辺約5.5mの正方形を呈する大型の住居址で、方位はほぼ磁北に合致する。覆土は黒褐色土で、縄文時代の住居址の覆土とは明らかに異なる。床面は確認面より約30cmの深さであり、住居址の各辺には床面から10cm程度掘り込んだ幅約20～30cmの周溝が存在する。カマドは住居址の東辺中央よりやや南寄りに存在し、規模は左右の幅約150cm、奥行き約110cmである。袖の部分には粘土塊が残存していたものの、煙道の痕跡・袖石などは認められなかった。カマドの中央部分には灰が塊の状態では認められ、その周囲には焼土や床面が炎によって赤焼けした痕跡が残る。一方、住居址の中央にも南北180cm、東西60cmの浅い掘り込み内（P－1）に焼土が存在するほか、これ以外にも住居址の北辺・西辺の周溝付近、北東隅のピット内（P－2．3．4）に焼土の痕跡が残る。柱穴については、住居址の西辺と中央付近に南北に並ぶ4ヶ所のピットがほぼ等間隔（約240cm）に位置し、これに該当すると考えられる（P－5．6．7．8）。こうした住居址のカマドと反対側に4ヶ所の柱穴が偏る例は長野県松本市周辺でも確認され、B2類として位置づけられている。住居址の南壁と4ヶ所の柱穴の中央には住居址と方位を同じくする長方形の浅い落ち込み（P－9．10）が存在し、住居に付属した施設と考えられる。住居址の東南隅には、深さ40～60cmのピットが2基（P－11．12）存在するが、このうちP－11は底面に黒色の炭が約15cm堆積しており、カマドに伴う炭の貯蔵穴の可能性はある。

39号住居址の出土遺物（第11図）は、須恵器（坏・甕）、土師器（坏・高台坏・蓋・甕・皿）、灰釉陶器である。1～5の土師器坏はいわゆる「甲斐型坏」であり、内面体部に放射状暗文と外面体部下半に斜方向のヘラ削りが施されている。口径11.0cm前後、底径4.8～5.4cmで、底径が口